『水滸伝』で司馬遼太郎賞受賞

北方謙三さん 73年法学部卒

『若者よ、熱くなれ。私は作品で受けて立つ』

「バリケードの中の中大時代を振り返ると、純粋で一途でバカだったけど、熱かった。命が熱かったという思いは本物だったんだよ」――あの北方謙三さん(58)である。全19巻の『水滸伝』で第9回司馬遼太郎賞を受賞。また一つ、新境地を拓いた。心のうちになおたぎるもの。作家は、作品のモチーフに重ねて世代論を、ハードボイルドの文体に重ねて生き方を、低い声で熱く語り続けた。

構成／学生記者 **池内真由**(法学部2年)

東京・芝白金の都ホテルの一室で、北方さんは執筆中だった。パソコン主流になって、いまでは作家でも少なくなったが、原稿用紙にペン書きである。

「これは『野性時代』に連載するブラディ・ドールシリーズの続編『約束の街』の原稿。中国に長く行っていたので、いま綱渡り状態で締め切りをクリアしなければいけないんですよ」

連載が5、6本。月に400字詰め原稿用紙で400枚ほどになる。書くのが早い。量産の力技を評して、「月刊・北方」と呼ばれたこともあった。

イスをくるりと回転して、「じゃ、いいですよ。どうぞ」。

葉巻に火をつける。「北方謙三」がそこにいた。

《司馬遼太郎賞(司馬遼太郎記念財団主催)は第1回受賞者・立花隆さんに始まる。「人と業績」が選考基準だった。それが第9回から「作品」に変わり、昨年12月6日の選考で北方版『水滸伝』(集英社)に決まった。

北方さんはことし3月の「第10回菜の花忌シンポジウム」で受賞者講演を行い、この日(4月18日)は都ホテルで受賞パーティー。夜からのパーティーを前に、川野邊明・「出版白門会」元幹事長と共同でインタビューした》

思うさま書けた幸せ

――受賞おめでとうございます。

北方 僕には、司馬遼太郎賞というよりも『水滸伝』なんかで賞がもらえるという認識が全然なかったんですよ。

僕にすれば、自分で思うとおりに書け、思うさま書けたという思いがあればそれでいいんだ。けれど、その作品にかかわったいろいろな人がいるんだよね。担当編集者をはじめとして、いろいろ調べてくれた人がいる、相談した人、書店の人や読んでくれた人……みんなに対して受賞

してよかったなと思う。

賞というのは結果の問題です。僕は一生懸命『水滸伝』が書けた。書けたことは幸せなことです。一生懸命書いて、それが本になって、それを読者が買ってくれて、それで「おもしろい」と言ってくれるんだから、そんな幸せなことはないですよ。

「物語の力」の復権 司馬文学の後進として

――司馬遼太郎さんについてどんな印象をお持ちですか。

北方 司馬さんは、私が歴史小説を書き始めたころから、歴史小説界の巨人というかたちで存在されていた。日本の歴史小説を振り返ってみると、司馬遼太郎の方法は非常に独自なんですね。物語とは別に歴史観を書いていって、場合によっては作者というかたちで司馬さん自身が登場してくる。それによって歴史が分かりやすく解説されて歴史小説の読者を増やしたという、非常に大きな功績があると思います。

ただそのあとに続く、われわれ後進がそれと同じ方法を取っていいのか。日本には昔から連綿と、いわゆる大衆小説の系譜というのがあって、中里介山（代表作に『大菩薩峠』）や白井喬二（『新撰組』）、林不忘（『丹下左膳』シリーズ）、大佛次郎（『鞍馬天狗』シリーズ）と、物語の作家がいたわけですよ。

けれども、今の日本の歴史小説の読者が司馬さんの方法に慣れてしまって、なかなか物語の中に入っていけない。つまり歴史の解説をしてもらわないと歴史小説を読んでいけないというような傾向も出てきている。功績のほうがはるかに大きいとは思うんですけれども、罪の部分もある。僕はたぶん最終的には司馬さんは、初期の作品にあるような、物語をまたお書きになりたかっただろうと思うんですよ。歴史の解説のついていない、純粋な物語をね。

それで私は後進として「物語の力」を取り戻す努力をすべきなのではないか、という思いがある。要するに歴史小説を書き始めたときに、司馬さんが「おまえは物語を書け」というかたちで導いてくださった、つまり私の方向を決定づけた気がしますね。

司馬遼太郎さんがいなかったら、僕は実は歴史の解説をしていたかもしれません。特に南北朝に挑んだわけですから。あそこは解説すると楽なんです。それを人がかかわってくる描写で書いていく。これは司馬さんの後進がやるべきことだろうと思います。

《きたかた・けんぞう 1947（昭和22年）、佐賀県生まれ。73年中央大学法学部法律学科卒。『弔鐘はるかなり』でデビュー。『眠りなき夜』で第1回日本冒険小説大賞（82年）・第4回吉川英治文学新人賞（83年）、『檻』で第2回冒険小説協会賞（83年）、『渇きの街』で日本推理作家協会賞（85年）

を受賞しハードボイルド作家としての地歩を築き、南北朝を題材にした『武王の門』（89年）を第一作に歴史小説へ向かう。『破軍の星』で柴田錬三郎賞（91年）、『楊家将』で吉川英治文学賞（04年）を受賞。２０００（平成12）年から、直木賞選考委員もつとめる》

北方版『三国志』『水滸伝』の地平

受賞作の北方版『水滸伝』は、『三国志』全13巻（角川春樹事務所）につづく大河小説になる。6年がかりで全19巻、原稿用紙1万枚にも及ぶ。

原典の『水滸伝』は明代に書かれた中国の小説で、四大奇書の一つ。北宋時代末期、汚職官吏たちの腐敗は極まり、社会からはじき出された無法者や英雄好漢が「梁山泊」に結集して軍団を成し、体制と悪徳官吏に立ち向かう物語だ。

――故吉川英治も『三国志』『新・水滸伝』を書いていますね。吉川英治版と北方版ではどのような違いがありますか。

北方　僕も吉川さんの『三国志』の愛読者でした。おもしろいと思います。だけれども、これは『三国演義』がもとになっている。『三国志』は、中国の実際の歴史・正史で、『魏書』の中の「曹操伝」を基幹にした列伝体の歴史書ですよね。一方、『演義』は正史をもとにして書かれてはいるけれども、4割ぐらいは創作、創造といっていいわけですよ。その部分も吉川さんは踏襲して、『三国演義』というかたちで紹介された。

私は『三国志』を正史に基づいた覇権を争う男たちの小説として書いていこうという発想で書きましたので、吉川さんの『三国志』とはまるで違うものができあがったと言えると思うんです。ですからその4割の部分に私は自分の想像力というものを加味して書いたということになりますかね。

――『水滸伝』に関しては。

北方　『水滸伝』の一部分を書いている作家はいるんですけどね。柴田錬三郎さん（故人）が『われら梁山泊の好漢』という小説をお書きになっているし、吉川さんの『新・水滸伝』がある。しかし、これは始められてすぐに亡くなられたので、『水滸伝』を完結させた作家はじつはいないんですよ。

かたちとして、江戸時代に『里見八犬伝』に出てくる8人は、『水滸伝』を下敷きにして選んでいる。それから野村胡堂の『銭形平次』は銭を投げるでしょう。あれは『水滸伝』の登場人物の1人、没羽箭張清という、つぶてうちの名人が下敷きになっているんです。

――そうなんですか。

北方　そうです。江戸時代からずっと『水滸伝』は日本の作家に影響を与え続けてきているんです。なぜ影響を与え続けてきたかといえば、解釈の多様性、つまりはどうにでも解釈できるところがある。

『水滸伝』の原典は本当にいいかげんな物語なんですよ。つまり説話ですね。石に没羽箭張清とか、九紋竜史進とか、小石にいっぱい書いて、袋にぎゅうぎゅう１０８つ入れていくわけです。それで１０８入ったらきゅっと口を絞って、『水滸伝』と書いてしまった。説話とか民話とか伝承とか、そういうものの寄せ集めになっているんですよ。それはそれで、キャラクターが立っている人物は立っていて、非常に怪しい魅力もあるんだけれど、まずストーリーがめちゃくちゃなこと。時制もめちゃくちゃ。いろいろな人が書いているから。

例えば武松という人間が出てくる。これは『武十回』という有名な京劇があるんですが、武松は10回主役を張る。その『武十回』も原典を読んでみると、10回とも人格も容姿も違うんですよ。

だから、私自身の水滸伝を書くことも許されるだろう。その民話・説話の一つに加えてもらおうと。だけ

ど19巻、非常に長いけどね。私の小説では『水滸伝』の中に出てくるエピソードを少しひねって、「革命の物語」になっています。

「梁山泊」とキューバ革命、全共闘運動…

――革命の物語。それは北方さん自身が生きてきた時代の中で実感してきた革命なんでしょうか。キューバ革命といったような。

北方　そうです。それは作家的な、内的な動機。作家の内的な動機というのは必ずしも実作につながるわけではないんだけれど、小説として何かキューバ革命のごときものを書きたいという思いがあったんですよ。

私の学生時代はどっぷり学生運動の時代ですよ。中央大学はお茶の水にあった。学部・教室の建物がコの字型、本当に箱形になっていて、中庭がある。そうすると出入口を3カ所ぐらい封鎖してしまったら、全学封鎖という状態になってしまうわけ。非常に封鎖しやすい大学で、活動家たちは革命がどうのとか、マルクス・レーニンがどうのと言っていたわけですよ。その中で、本当の活動家はマルクス主義者だったろうけれども、なんとなく革命という言葉にロマンを感じたりしている人間がみんな加わった。当時の言葉でいえば「ノンセクト・ラジカル」だよね。

でも革命なんて本当に起きるのか。例えば現代史では、スペイン内乱（1936年――39年）があった。これはジョージ・オーウェルとかヘミングウェイとかいろいろな作家が参加したけれども、結局残ったものは戦争に対する幻滅だった。

ところがもっと近い現代、59年にキューバ革命が起きた。何十人かでキューバ島に上陸して、ジャングルの中にこもって、少しずつ少しずつ仲間を増やしながら、ついにはアメリカの全面的なバックアップを受けているバティスタの政権を倒した。60年代に大学生だったわれわれにとって、それは非常にロマンチックなものとしてあったわけですよ。

――キューバ革命の伝説的な革命家、チェ・ゲバラ（67年ボリビアで殺害された）の著書やポスターなども氾濫しましたね。

北方　そう。バリケードの中で、自分たちもキューバ革命みたいなものを起こせるんじゃないかというふうなことを、一応考えたわけ。キューバと比べると、武装といってもこん棒で、機動隊だってこっちを撃ち殺すわけではなくて、放水でけ散らすというようなものだった。「割りばしと水鉄砲の戦争」と言われたんだけれど、血は熱くなったんですよ。

命が熱かった

――熱い「全共闘」論ですね。

北方　だから今考えると純粋で一途でバカだけど、たしかに熱かった。命が熱かった。でもそれが青春だと思うのよ。利口なことをやるのが青春ではなくてね。

今、命を熱くしようと思ったって、この年になったら命は熱くならないわけですよ。いろいろなことを知ってしまって、革命なんかできるわけないじゃないかと。ソ連も崩壊して、革命というよりマルクス主義という思想そのものが実は幻想だったんじゃないかと言われるような状態になった。

だけれども、その後振り返ってみて、何が本物だったかというと、マルクス主義が本物だったわけでもなく、革命が本物だったわけでもなく、われわれの青春が本物だった。つまり熱くなった思いが本物だっただろう。今だって熱くなろうと思えば、若い人だってなれるはずなんだよね。なろうとしないけれどね。

けれども、その熱くなったものを再現するということ、これは小説の中ではできるんです。自分の人生の中ではできない。キューバ革命があって、それがロマンチックだなと思って、自分が熱くなったという思

いうか、牽強付会かもしれないけれども、ある革命の原型というのは見ることができるんです。梁山泊軍がそこから広がっていって、宋を倒そうとするわけだから。

そういう中で生きている男たち一人ひとりの中に、青春の熱さみたいなものを移し替えていくというのが『水滸伝』なんです。

――全軍壊滅した梁山泊からただひとり生き残る「楊令」は、ひときわ印象的ですね。政治的・社会的には「壮大なゼロ」だった、と言われる70年代学生運動とだぶってきます。楊令に「持続する志」を託すかのように。もちろん創作上の人物ですよね。

北方　ええ、そう。秋から「楊令伝」の連載を始めます。これも1回150枚から200枚で、長編になるでしょう。また原稿の全体量がふえて大変だけどね。

《『水滸伝』の完。第19巻「旌旗（せいき）の章」――「天捷の星」のエンディングを抜粋しよう。

……生きる、生きる。走った。／突き出した岩から、跳躍した。／水の拡がりだけが、楊令の視界にあった。／生きる。宙を飛びながら、楊令は肚（はら）の底から叫び声をあげた。》

ハードボイルドとは何か
美学・文体論

――「ハードボイルド」とは何か。北方さんといえば、やはりハードボイルド哲学、あるいは美学を聞きたいところです。

北方　ハードボイルドといっても、いろいろなものがあるので、僕はあまり気にしないようにしていますけどね。例えば、大沢在昌（代表作に『新宿鮫』シリーズ）が書いているハードボイルドと私が書いているハードボイルドとは違う。私にはまず文体の問題が一つある。切りつめた文体を追って、行間の中で物事を表現していくというのが一つ。

それからもう一つは、男はいかに死ぬかを書く。いかに死ぬかというテーマは、死に方だけ派手に書いてもどうしようもないわけで、これだけ生きた人間が死ぬ、という重み。読む人に衝撃力があるような、男の生き方を書くということですよね。それが私のハードボイルドですね。

《その文体の魅力。『鎖』（83年刊）から引用してみたい。

立ち上がる。両腕を押さえられた。自由なのは足だけだ。宙を蹴った。腹に、続けて三発きた。……ビルが、空が、動いている。ちがう。引き擦られているのだ。》

――形容詞を削りおとした短文。とくに格闘シーンの、肉体の痛みがモロに伝わってくるような文体は新鮮でした。作家にも刺激を与え、読者はシビれた。

北方　文体論というのは基本的には修練なんです。

今たくさんの若い人たちが小説を

書いて、新人賞に応募してきます。その中にキラッと光るものもある。受賞したりもする。だけど受賞したあと消えていったりする。なぜ消えていくか。これは修練を積んでないからなんです。きちんと修練を積んで、自分の文体というものを獲得すればいいんです。例えば文章をずっと書き続ける。文体はだれでも持てるが、きちっとした文体をつくり上げるにはそうとうな修練が必要なんだ。感性はもともと持っているものでしょう。だからパッとそれが光るときがある。光ったら、本当に才能があるのかとなると、それだけではなくて、10年間修練できる忍耐力があるか。その忍耐力も才能のうちなんです。

団塊の世代は死なない

——作品のモチーフとしてもそうですが、北方さんの全身に「団塊世代」の志が脈打っている感じですね。

北方　僕ひとりがやっているのではなくて、僕は目立つんだろうと思いますね。

全共闘世代というのは団塊の世代で、世界一になったノウハウと、だめになったものを取り戻すノウハウと、2つのノウハウがある。その団塊世代が2007年に定年を迎えるといっておとなしく、「はい、はい。もうリタイアします」なんて言わないよ。そのノウハウだけは絶対離さないよ。それで若いやつらが困っているときに「おれにはノウハウがあるんだよ。おれが会社に勤めていたころのペイではおれは働いてやらないよ。もっといっぱい出せ」。そうすると若いやつはまだまだこれから団塊にこき使われる。

——元気のいい、さながら「異議申し立て」老人層の出現で、老人問題の社会風景が一変するかもしれませんね。

北方　だから今、世の中の動きが少しずつ変わりつつある。消費だって団塊を対象にしたものを商品にしようとする。これは団塊が年金を少しずつセコく使いながら生きていこうなんて思っていない、というのがみんなに見えるからだよ。今まで会社という縛りの中でやっていたものが自由になって、何だって自分の力を100%出してやるという状態になったら、団塊は強いですよ。一番分かりやすいのは、われわれの作家の世界は、定年がない。だからおれなんかが直木賞の選考会に行ったら最年少で、小僧扱いだよね。小僧扱いだよ。70代の大作家ばかりだから。これからおれたちの時代でしょう。

川野邊さん（左）と池内

実力の世界では団塊はまだリタイアしていないんだよね。制度の世界でリタイアしているだけなんだよ。それを若い人たちは「あいつらやっといなくなった。でも私たちがあいつらの年金を払ってやらなければいかん」というふうに思っているでしょう。それは十分思えばいい。それは闘えばいいの。だって2007年問題というのは団塊の問題ではないんです。若い人たちが年金をいっぱい払って、自分たちはもらえないかもしれないという問題なんだよ。団塊の2007年問題というのは若い人たちの問題なんだ。

団塊のやつらがなぜ嫌われるかといったら、どこへ行ったって負けないから。いつも競争してきたからさ。いつも競争してきたから、何かあっ

たら競争だという感じになるわけ。

――あんまり元気よすぎると、コワイような気もしますけど。

昔はみな「飢えたネズミ」だった　あの暗さが懐かしい

――大学を出てから、中央大学を意識されることはありますか。

北方　あまりないですね。弁護士が必要かなというときは同級生はいっぱいいるので、たまに司法試験の合格率を見て、最近は「だらしねえな」と思いますよ。

僕なんか法学部でも勉強もしなかったから、司法試験とは縁がなかったんだけれど、友人はみんな縁があったわけですよ。司法試験の合格者数は中大が断然トップ（70年まで20年間続いた）で、東大行ったって、「冗談じゃないぜ。法科の中央だぜ」とデカイ顔をしていたね。法律を勉強しなくても、法学部に在籍しているだけでね。

昔、早稲田のやつなんか、おれのところに来て、頭を下げて、「兄貴分になってくれ」と言うんだよ。「何でだよ」と言ったら、「おれ、早稲田の法学部だけど、これから先は頭がよくなければいけないから、中大の法学部にいるやつの弟分になりたいんだよ」と言っていた。くだらない話だけれどね。

今は4位ぐらい？　ダメだな。昔のやつらは、眉毛を片方だけ剃っちゃったりしてさ。そうすると恥ずかしくて外へ出られないわけよ。で、家にこもって勉強していたんだから。

2号館の4階に真法会とか研究会がわーっとあってね。汚いんだよ。ドアもなくて、カーテンだけとか。そんな狭いとこでみんなでがーっと勉強していたんだよ。そういうやつらがどんどん司法試験に受かっていったんだ。

――法律学科卒ですよね。

北方　そう。担保物権法の、物権変動というのが専門だったんだけれども、全然覚えてない（笑）。めし屋なんかで友達になっている弁護士なんかが話しかけてきて、「おれだって法学部だよ」なんて言うと、「何をやっていたんですか」「物権変動だよ」と言うと、「えっ」とか何とか言っているね。

――多摩のほうにはいらしたことはありますか。

北方　講演に行ったことがあります。

――もうがらっと変わった感じでしょう。

北方　お茶の水2号館のあの暗さ。あの暗さが、暗いエネルギーを生んで、司法試験の合格者を出したんじゃないかと思うんですよね。あの暗さがないですね。もう明るくて、キャンパスが広くてね。お茶の水には、中庭しかなかったんだから。

――あの中庭が、多摩では第1体育館と同じ広さだそうですよ。

北方　でしょう。あんなところに大学があること自体が間違いといわれたら、間違いだったわけですけどね（笑）。

要するに、お茶の水の中大には、「飢えたネズミ」がいっぱいいた。飢えたネズミがいっぱいいて、おなかがいっぱいになりたいなと思ってみんな頑張ったんだよ。本当に。飢えたドブネズミみたいなものだけど、みんな頑張っていた。

それからおれみたいなどうでもいい学生は、とりあえず関西のやつに負けてたまるかと、棒持って。そこで頑張ったって何の得にもならないんだよ。人生も一緒に棒に振るようなものなんだけれど、それでも頑張っていたわけ。当時、「中大ブント」のリーダーといったら、理論派の大物、あの……。

（と名をあげて、熱く激しくまた「全共闘のころ」にワープする趣なので割愛するが、北方さんの作家の原点も大学時代だった。在学中に同人誌に発表した「明るい街へ」が文芸誌『新潮』に転載されることになった。それを伝えに紛争中の中大を訪れた

編集者は、バリケード越しに、名前を呼び叫んだという。ときに、北方さんは法学部4年生、22歳だった）

――箱根駅伝なども見られますか。

北方　箱根駅伝はあまり見ないです。駅伝も昔は結構熱中していましたよ。駅伝をやっていたやつがいて、バーで飲んでいると、しょっちゅうやって来ては、昔の話しかしない。「駅伝の話をしたまえ」と言ってね（笑）。

駅伝も強かったし、相撲も強かった。野球でも東都では優勝したことがあったなぁ。

何か反発はないか「若さだよ、熱さだよ」

――日ごろ若者に対して感じていらっしゃること、若者論を聞かせてください。

北方　熱さがない。熱さがなくて、腰抜けである。それからオタクである。バカなことができるバカと、バカなことができないバカがいるが、バカなことはできないバカである。それだけ言われたら何か反発はないか（笑）。

――ずいぶん言われちゃいましたが、若者に希望はない、とおっしゃるのでしょうか。

北方　希望はいつもつくるものです。僕らは希望をつくった。自分たちで、幻想かもしれないけれど希望をつくった。希望をつくるのは若者の特権だよ。幻想でもいいんです。それに向かって、その希望を実現しようとして、闘って、ボロボロになったっていいんだよ。それで現実を知ったり、社会を知ったり、それから自分の力を知ったりするんです。そういうことが必要だと思う。

いいね、若くてね（笑）。これからいっぱいあるぞ、いろいろなことが。あなたが将来どうなるか、それはわからないけれど、自己の確立というのかな、自分をきちんと確立することと、それからバカさ加減を失わないこと、それが大事だね。

――「個性の時代」と言われて、学生には強迫観念のようになっています。

北方　個性はみんなあるじゃない。テレビゲームがうまいやつとかさ、あるゲームに凝るとかね。つまり非常に狭いところで個性がいっぱいある。とんでもないやつがいない。とんでもないやつがいるなと思ったら、ゲームの世界を現実に持ち込んだとんでもないやつだけだよ。ある意味で、政治家は非常にやりやすいと思うね。言ったら悪いけれど、半分去勢されたみたいなものだから。

おれはちょっと刺激的なことを学生に言っている。学生たちは向かってくればいい。おれはいつだって受けて立つから。作品で受けて立つから。

まぁ、「今の若い者が」というのはずっと繰り返されていることなのよ。われわれにあって君たちにないもの、逆に、おれになくて君たちにあるものというのがある。これが何かというと、若さだよ。それを生かしてほしいよ。

おれたちは獲得する若さがないんだから。だからあと10年たったときに、君らが、団塊の世代がまだデカイ顔をしていたら、それを全部押しのけて、「私たちの時代だ」と言えるようになれば、日本はちゃんとしているんだろうね。

――これだけ挑発と刺激を受けたのですから、頑張ります。

◇

10月発売の『小説すばる』（集英社）11月号で、『水滸伝』の続編になる「楊令伝」第1回の連載がスタートした。